1 5
1597
1

駿台雜話

駿台雜話

不許轉寫

15
205

門イ6
號1597
2表 1
冊 五 文雜 士
號 士

鳩巣先生著

駿臺雜話

東都　崇文堂梓

不許翻刻

新刊駿臺雜話序

駿臺雜話五巻迺鳩巣室先生之所著也夫以講論之餘尊と及此言大抵發乎所問者而研窮理義深鑑人物或往事之可感或當世之可警莫非守正學而扶名教之意也何其諄々諭人之若是哉一時遊門之士皆虛往而實歸從可知已明遠雖不敏記紀下座竊與有聞焉嗟乎在則人亡則書先生已遠孔原不作後之讀此書者亦可以想見其造詣之深爾雖然鐘之應撞而始鳴其聲之大小洪纖惟隨乎其

所叩則善教之待其問理亦不異於是而先生之蘊
固有非斯書所能盡者矣書肆崇文堂請上諸木以
傳不朽因與其孫室直温謀焉遂告之
官以一本授之適剞劂功成矣於是乎序

寛延庚午十一月冬至日

東都　直學士藤原明遠謹識

さく〳〵しやくとしてやすらかに我の世にあらはれ出なれば
世はなし。宴は世翁の餞に年尊ちかしく。
書を講じ文を論じいはれ聞事にして行なきに
て帰路を思ひし。其年花の霞月に出し寒に出れ
是は同じ年のよのにて世はあはれゆかしき事とも隠し
たゝけ翁。自らも辞し僕を見まくて地をもすなし。
むかしより良辰を窮むしるや。嘉會を得つゝけ
まだ〴〵富貴ともに唐錦たくまくわらく流
れそし。翁もそれを對して清談すらまほしのこ

て我の煩ひしさも人になつて昔のはしの傳まへいふし
今此世にいふ所の難波の事のよしあしやすく
年々来進みての何をかかし心のかやきなき辞まう
しかし世にすり鄙しとわか方を擬せきせてく。
わの古體さ蔵してもやよひし文字をいはし置ひしと。
自ら我迎へ出しは忠義の心かしやよわに背識
をきせ人〴〵敬自をもとしもし世このなき書片にて。
なしてより見きやうなれあらはしもし古人の
雞肋にもせしもも類しねくしけ人の反故やく

駿臺雜話目錄

仁集

老學の自叙
異說まちゝ
愚公の山
[illegible]公の龍
矯狂警惰
鬼神の德
妖を人よりも與る
年内の立春
釋源空の誓
心の月
老僧の接木
扁鵲菜匙を
忠孝の心
聖人の識
飛騨山の天狗
神ひちくの歌

諸道きさうの人

義集

武運の稽古

天人相勝

鈴木重三歌

不吱不求

秘事ハ睫

仁ハ心のいろ

浩然の氣

民も王者の天

釈寂室の秘訣

善悪の報

夢乃浮世

勢のよりの花一時

春秋のわかれ

佛よりするやう

義も心のまゝ

敬の工夫

富士のすがた望

天下の寶

禮集

天下ハ天下ゝ天下

枚田壹岐

阿閉掃部

嚴寒知松柏

烈女槿女

天野三郎兵衛

二人の乞兒

智集

風俗ハ改の田地

直諫ハ一番鎗より強し

伴大膳

士の風義

手折り手よゆゝ春風

澤橋の母

結髮の伺ひ

燈臺もとくらし
法ハ江河のあと
ばかり草
渡邊番
巷時の意欲
足利家の乱
兵法の大事
兵ハ詭道
大敵ハよわし

信集

運慶の口傳
鵜鶘の物
青砥の續松
大佛の銭
楠正成
武田信繁
孫臏韓信の兵法
不忘向君

月々世くの秘見
遍照の思ふ
詩文の評品
六義の沙汰
多殘著賈
墨陽大師
言ハ身の文
尤物人を移す
駿臺問答の話
所論の書よりも
離騷の秘事
世をとくに分をすくに
倭歌ハ感興の益あり
作文ハ讀書よりも
文章の盛衰
寸鉄人を殺す
一日の澤
年よりたう
駿臺問答の話ハ限りあれ
所論の書よりも諸生の問ハ答ふ

まことに所論の文章甚だ美しくして齊一なり。所問の事多端なりて一よわ難し。今あらく所記す。正道を明らかにし邪伎を辨じ、すべて学問の大綱を修め、又は世俗の諺浅近の語をいふ。学生の事を幽にして、観者の益となるべきものを採集し、志ある人の奉覧をもとめ、其中に抜要の一法を撰ぶ。篇ごとに分けしも、鋪叙偏なり。議論褸出するやうなきこと多し。わが学ぶ所なり。撰次もとより書やすからんことをもとめたるのみ。語もまた叙述もとより家に賜ふ。亜あるべし。図語たやすく古雅なるべきこと、世俗のやすき法を避るべきこと。

事情を述べ、人聴を切なるべきこと、鄙しき俗語なくして、その事を用ゐ、擇ひ去るべきこと、又近代漢字をもちひず、常語をすべからず。蔡家の盛衰は、運なり。武士の我切は武道といひ、人は礼節すべし。礼節義理を敬ふ。地位を卑しくすべからず。義理を敬ふ。若又の如くなれば、甚だ卑賤なり。今改るに及ばず。又字は誤りとなる。布すべからず。倘字たるべきこと、觸字をもちひ、強弩を敬ふべきこと、押字をもち

ゆゑ等ハ回剃より誤らるゝなり。白雪の流と考たゝ
とゝ云ふ字字ともに。種葉の田をそゝけゝ云ふ。扇字
をもゝ。俳諧の人とゝ云ふ。他字を用ゆ。それハ白下の二字
と合せゝ一字ゝ云ふ。巽の下垂すれゝ云ふ。白田
の二字を合せゝ一字とす。白地の田とゝ云ふ。人加の
二字を合せゝ一字とす。人の相かゝとゝ云ふ。又田
仇の兵とゝかゝゝ云ふ。味方の字をもゆれ。一味の方とゝ云
語を略するなり。又家號氏族のちゐかちとゝ云ふ。梶字を
用ゆ。それハ柁字を誤ゝ梶と作るなり。類似名
をゝゝ共詞を考ゝ。されと富山梶

なとゝ云ふ氏族を考るもそれハ似名をもちゆ誤。誤なるゝ
真名をもちひるゝも。皆なすゝ用ゆ。
雜話の中より用る古語古文をゝゝハ事實頗多し。
そのこゝ客ゝ對ゝ。わ所ゝ考ゝ。ゝ考ゝ。
行ゝもゝ。ゝ考ゝ。又ゝ首尾せわ事もわ。ハ後ゝ
な書を撰ゝ考ゝ。今老耄ゝ。精神も
乏ゝ。そのお處を高ゝ。考ゝ考ゝわ考ゝわ。
必ゝ考ゝ。考索せゝ。善惡共わ所ハ多ゝ
大意のわるゝをゝ。共作ゝ論ゝ多ゝ

駿臺雜話巻一目錄

仁集

老學士自叙　釈源空の折言
異説まちゞ　心の因元
愚公の山　老僧の接木
葉公の龍　扁鵲藥是を示す
矯性警惰　忠厚の心
鬼神の德　聖人の誠
妖人の奥る　飛騨山の天狗
幸内の立春　神ゝの歌

諸道ものしり人　　釈　空の秘訣

駿臣雑話巻一

老学自叙

ものしらぬ身の過去を思ふにそもそも武蔵国おくかんおよびしの、こゝ初く奴、城結びて、詩書礼楽をもてあそぶこのつゝ、或は檄を持く藩邸小游しおりて及を負て、京師より藤食原、其後小地に家居をしこの八常に舊学を修め、素願を償て、一生を終る事、城下をんとこの中に出郷より僅年をへらさるに、大家の徴を辱ふして、ゆゑひ故郷に還せしかも老材腐て、やゝて丘壑に死を待程なれ共、なほ、されども多くの歳月を仰く今おもひ、七十よわの冬年あて、

学ばざる道を志すとなり。人の師表となる人、道徳もすぐ
又命ずるの才材能もすぐれしかもすぐれ世にあらはれ
ざるこゝ、幸なるまさしく義を信じて、おのゝ同志なる人々と共に
自得し、ある幸を活用すべきのせつ、後学の為にとゞめ、それを
を書くべきなり。甲斐とはいふも、病をつとめ
痛をゆんで、たゝえに書を講ずるおのゝ、わるる月時を
て、宋儒の家学術の実因よりおこる。産中は程朱の説を
貶し、わるしく、新説を作り、某とつゝ、儒者は習
て記誦詞章を学ぶ、多くは年月を曠しむ、或は怠惰
日の非を悔ゆ。昔て古人已に為まるの学に志あるとも、不

幸にして良師友をなすこゝ、諸儒紛々説を駁惑
て程朱を学信し、未窮ひたく定見なの所に行よりして又
むかしく、家門世学なるを、年四十を生きあるをしらず、
こゝ程朱の学ばるを易ることを、それより月
日程朱の書をよゝて、心を満め四を覈する、今より手
を作書をよく高くきれいに、高遠を道を卑近
おのゝ聖人、僕あるを必其言を信んを、天地の乾坤
堯舜の道なるの、堯舜の道無孔孟の道なるの、孔孟の
程朱の道なるの、程朱の道なるを捨て、孔孟の道なるを捨て、
堯舜の道なるを捨て、堯舜の道なるを捨て

て天地の道を知らんと欲し老子を信ずるに人事を忘れ
事を信ずるに元亨貞の実を知らず幸にして信ずるも一實
見命してさるべきことなり翁の刃怒天地の罰を蒙る
ものなり折ふしの世中も聽を改むる氣なし其時翁い
はく嫡孫百年来論定まる幸なる人々文翁のちひを信
ずに恥わる人程朱を信ずるに代の頑学者なるべし宋潛
溪うおく百家を綜接する楊升菴ひとりく文学後
代の者よおいく人程朱を儀とする学術仁徳をおいく人間

然たる事なきに非ず明の中葉にて人物やう其事
術と学しく名教頽廢せしやう王陽明おく良知学
を唱へ朱子の排をしよりて明の学風大変し陽明歿後
おく其徒王龍溪のたいきに法ありて学者良知の沈溺し
学者良知の沈溺し嘉靖萬曆の間
つのおく天下の学ち陽儒陰佛の流となりてやはり諸賢
思く足ず西山以下の諸賢多ひ汗下なりとく所好の阿
徒多中ちおし又其徳行材識つまと明重義人外儒ちの
ちまわるをおわるとそもそも程朱萬分の一ちと及ばず学識
をとく称くなりとく称識する鶴の鵬を笑ふ蟻の

て海を測るに似たり。韓愈、いくばくか斗よりせまく天を語る。天とはわれらをいふの類なり。彼は荒唐無稽なる議は、其説は新奇なる所を為す。雷同附和の輩、国家百年の禁令を犯す。文化年間、師儒世を革むるに、其説は邪説を唱へ、崇信して、ながき模範を失ふに至る。そもそもこれ倫理なくして、始めて一家成る。そのこれをとせしめんとす。其説はあんらんの説、流弊をわたるべし。老荘の儒、そもそも其説はあんらんの説、揭粒の論を騁して、忌憚なく、一大虚を吐き、韓愈は、きはめて排斥するなり。邪説横議世を惑はすこと、洪水猛獣の如し。韓愈、仏老を遮止せんとせば、仏骨を表して、

世を惑はし、排斥して、これを洞庭に沈めしかの函箱に書を入るる、天地鬼神臨之在上、質之在傍、と折言し、そもそも余翁ら、いまだ函を開かざるに、韓愈のうたがひをはらすべし。おもふに、空言と極まるべし。

釋源空のちひ

むかし源空上人、九條の月輪殿（法の世）一枚起請とて、今は新正谷にあり。其折言書、我翁ら見れば、そのこと人を惑はす。念仏すれば、極楽に生まるべし。源空地獄に堕ちたりしかば、源空、てちさきをはかる事、はなはだ、吾儒のこれを、其折言

にてこそいはれぬるなれ。わが身、いうまでもなく極悪とかつ
かつ父隆[illegible]を地獄にかうしつ。いくばくの折言ひくまぬ
ことなるべきわざかは。前代、殉死の制禁なりつ。諸
侯は家殉死わざわざ仕ふる中、[illegible]興論のたしむ人
もわづかに其家老に行く死とぞ思ふ。
中く詐謀さまざまにして、[illegible]を將
さて一緒に仕ふ。さらば折言ひくよとぞ。
仁安二年、[illegible]其翌日あり。殉死は面く亡君は[illegible]
へき相約して、常に聚[illegible]日あり紀藩名物をかしこ[illegible]
て[illegible]の老にも行くべき上座に[illegible]昨日ちひ[illegible]

そもく諸侯いとは[illegible]老にうらうらして、墓を
[illegible]歎き給ふ。いく折言ひ[illegible]
うしなひ、其人、[illegible]を歎きひるはいはゆる昨日の
[illegible]のうしなひ[illegible]
折言ひ[illegible]神罰を得ひとくも。死ぬ[illegible]
[illegible]死をきそふ[illegible]
[illegible]折言ひ[illegible]
人の[illegible]喪[illegible]神罰なり。
[illegible]源宣[illegible]
[illegible]折言ひ[illegible]
[illegible]折言ひ[illegible]

をうくしきかたちを后土に履く。天地のけうく折をも折[illegible]
誕るこゝハ天地の罰をうけ[illegible]我道の高[illegible]を深
かくも同じくものゝ[illegible]ハ[illegible]教化の教育[illegible]
實我慢こゝろ[illegible]ハ[illegible]有を[illegible]
虛を實にせ[illegible]實を虛にこゝ[illegible]ハ
こゝろ虛のゆ事なきもとゝ[illegible]真俗一如[illegible]
往生此教をゆ[illegible]衆生を導けハ賢愚[illegible]
渡らんすべて念佛滅罪[illegible]
密有ものゝ我[illegible]ハ[illegible]有を
互にこゝろとゝくこゝろ清く候ハ[illegible]

幸とゝ[illegible]今浄土の折[illegible]相傳の前[illegible]九條殿[illegible]
[illegible]浄土[illegible]隣[illegible]地獄[illegible]
こゝに有[illegible]虛をゆく實[illegible]て[illegible]生死を離さん
るはとすゝ釈迦の[illegible]
[illegible]雲泥のさ[illegible]

異説[illegible]

わゝ自翁の病を問[illegible]人[illegible]
[illegible]今[illegible]
[illegible]

むかしより多く今の西京東都なるに世に鳴る人を率る儒者の徒を聖学とし或は我国に道とし神道を教へとしもわ
ず或は陽明の学とし良知とるわすしてそもそもわが古学に
とく新義を造りとくもわが紛々実固の流まちまちなる
いのまに先とし中を非とせん前に人なるに思ひ
あ新きとし高代門戸を多くして実流を喝するの者せう
今ようさうこの流やうさまの伝に学に伝を立る人さまそ
而思わるるに伝らしをして前の古く国を伝をもくいそ
いまるさまを伝らしそを通を天くして一原なるの
なるその一原のとあるなさ、悟くなきに切の国に道と

て人の国こうはうへうらしに良知に伝とく窮理とるへうす
す鄒魯に学とく濂洛とたりもへうらしに伝りもに先を知りは
聖賢に書よりて聖賢の書はよりもやとうらしさまに志
を遂とくほくよりあるとしてはもの全伝得るは思人に
儒者あるへ自高ならわるて濂洛の書をくりく讀
人あれなるいはる程朱に離をも窺をして已の人に
先あるへ小人と大賢を議に不思の先に抵を姑くさ
思わ先其学に狩為深浅なるくくそもくに人に
るもの人を孔孟の書をもくほくく讀ずに人に死孟に
も得らしに孔孟のとに得をしてはいくく程朱に伝よ

論ずるのみ。孟子の後、程朱出でて、議論すること、孔夫子の
孔夫子と二ツなき事を信じ、その議論、八八のごとけれ
ども、程朱世代ちがひ、明朝に至りて、議論、八八あり。
今、程朱、孔夫子と議論、八八なるを、ほぼ、毛遂、いまだ用人成
ることを、一定、出来ずとして、又、己の道徳を術
孔夫子、八八なるを、其悔ひ、そなはれば、今、程朱と議論、
己の賢、八八なるを、許すべきなり。
ともに、孟子、いはく、我、国、その擔、湯武
放逐の類、八八、其、いまだ、練達、仁義の和、ならずや

ずんば、知、八八、其流を、きはめ、仏性を明徳、義、
義房、辯度、智、仁、勇、士、八八、其、いまだ、良知、光明の人、
さるゆゑ、孟子、いはく、其流をきはめ、大学を聖人の書、
ずんば、孔教の道、二ツ、八八、其、いまだ、古学、仏徳、
ずんば、其流、きはめ、我、国、その擔、湯武
仁義とかは、内外を合、古今を通ずるを、程朱、学問、
大中、玄正の道、孔夫子の心、流、八八、人倫、
箱、ゆく、思ひ、不、程朱の学、とすれども、力、
踐履、せざ、して、多く、議論、のみ、事、
ずんば、道、なく、ものの得、ることなく、明、
ずんば、其、弊

わ[illegible]れよ陽明も支離をとして学問を識[illegible]し邪説の起[illegible]
元[illegible]わ[illegible]く[illegible]行[illegible]ふ[illegible]実行を忘[illegible]空談を[illegible]
聖賢の病[illegible]今文[illegible]
[illegible]慎[illegible]

心のわ[illegible]

庄中又[illegible]
実行[illegible]邪説を距く上第[illegible]
孟子[illegible]揚墨を距く好辯の譏[illegible]
編して君子[illegible]
辯の徒[illegible]

[illegible]る本末[illegible]辯説を[illegible]
[illegible]吾道を[illegible]
[illegible]傷者の徒[illegible]
[illegible]聖人の[illegible]
[illegible]父雅風流[illegible]五倫の[illegible]
[illegible]天性[illegible]
[illegible]聖人の[illegible]
[illegible]変[illegible]
[illegible]邪説[illegible]
[illegible]東坡[illegible]

涅槃経より生れ出るの音月〳〵に新芽他所にて思ひ合わせ遠き及ばざる所の思ひ寄

を見給ふとやすきまく音くらく人おわ月て、いうかする地と異てこの人さへ月をかく圓なるやうにかく胴羅を探らせ給ふ。胴羅とあらくさて八月を聲わる地とおもふ。又この人ハ月を光わる胴のあるゆへハ、あの胴のうちわるさやうにおもへれ乃ち、のあくといふを風て、燭燭をあて、さて八月をかくと長ふるあやまりあり。今此世俗道理くらき人民ハ、書を讀ても道理くらき尺いよ人とさく〳〵同ゝ様わきまへぬと言あるまく侍るさまハその言ゝるとていろくこおとをしやらに此人の目をそのあやまりあるあるもわるくきそう人今所るおとゝきの法ゝ所わあてなわ

乃ち人をわるくいふ。あるハ奏心の人を相もあて是非を論ずるよ仰ぎ、その編まるく人とさ紀と同ゝるとやあり。絶まるも翁知てくに此流の起りを考るに其人とわ紀綱の儒なり。紀綱の儒ハ諸子百家を渉獵ふるとをのく好ゝて。四子六経さらとをもるるなり。あ一其文辭刻詰を貪議して、孫の姪きを及ぶ所、自ら己わの学ハ義理よりきを尺ふ所飽まく已の博学を自負して虚妄を要する程く世も亦是をとく推崇く一代の儒宗と尺。明季諸儒風大抵かくのあくとそまく放蕩不遜ありて人を蔑ひ地衡を高致やし好く大言を吐く先賢を毀ち抗論く高唐

宋儒のよくあんとせし所は、孔孟の有識なりしと人は学べども、荀荘の邪毒さるべし。文をもつて王李の浮華を拾ふべからざれ。人己の臆見をもつて、道を天地に求むべし。事物の理を窮めず、わが性をもつて己の曲学を企てず。文雅風流のもつて己が情を述べるべし。文物の和をもつて偏人の性を和すべし。学問は偏人の性を和すべし。世俗多くの中を信じて、辞を巧にするを奇怪とはなすべし。今文異端を作なす人の心術を害し、世の名教を損ずるもの多し。周礼を造言し刑あるべし。この所を弁ずべし。

一言を以て言へば、命を知り言に距き、辞を離れ、己を信じ、己の量を知り、己の識を守るべし。人は己を知らざるべし。己の量を知らざるべし。宋人の章甫を越に貿ふがごとし。断髪の俗中国に為す。経世は天下の名曲なり。郢客は陽春を楚に唱ふ。鈇を以て俗人和する人は、辞を巧にし、知我を知る人は、我心憂あり。知我を知る者は、我何ぞ求むべし。俗に多く蒼天なきに人を呼び、時の制の太史周家に書を乞ふ。ひとり俗を人に問ふ。人を問ふ吾道は書を乞ふ。幸にこのごとくなるべしと。

愚公の山

さるときは、翁、うんぬん知己と一世くもとめれども、得がたし。
儀妄敬して、根とわつる事のさんぬ世に行きくおかのーかな
きくきまのうらは女房花の一時とやとりきたりたつるきいつぬるのよ
ーしやー世と歴くこの通へうのうらぬるかのー。きつのれを心緩くして
よく其験とうんむやー思ずに来錬のあとくいつのもに伝君列子の
書と見給へやー是公やーいしーくわすれられ君ちのー山の
わすーいなくしくーとさん稼さんとくー。月くよみとしりかーー
ぬーのつら来報とうくー一簣にくあるちーとるとー智叟とい
ーー人見ぬくうくー大わるー山おわのーかるくのかくこるくいくく
こるちーくさるくーやー。是公きそのつ

代のうまーみのちそのてーウのこの是代かし後くあるちのの孫乃
代やと又其代代と後くあるちの代紹くハーとさん稼さねるす
やわるくさやくいくーるくー第乃とやんきーー是そわとしわ
富言かるまくハのくわるくハのつるくとしー是公のいくーかるるハ
世くこるちのーやくいくハ是公やー名作ー。智叟のいくーかるる。事ハ
世よ智かるーといくハ智叟やくー名作きるのしおのー我天乃
事。是公のちのーー代ーくくーー一乃乃ーー稼すくーー。稼のーー世よ
智わるーと称する行のくくー大のーー智叟のいくーくー是公のーー山と稼
をるのの事と用くくくくの是と第ーー行くーくのやのもーの功成
乃ーーわるくーー。きのくーー是公ーくーー智かのくーー世乃

人の世に賢ハ及ぶ事なきものなれども、禦冠の世に親しくて、
うくハいにしへよりも今の翁と百年偏定なるの只き分にて、
作者世の明智なる人なりとて、翁の迂闊なるあとを笑ひ、
さるにても老ひのなるまゝにわんぱ者をなるべきを作るんとあそ
思ひ作者と思ふ公の山城殿より歎かるゝ。

老僧の接木

さるにても老ひ出て幸わひ思ひの景わるく、若中
のさとにぱ乃院なくなりとの真言寺わひ、翁いとまなく
こゝろ共住作ともに寺なく行て、木の実ひろひ
わかして接ひの住作の時代事とゝん

作者〜残さ作ものゝ。寛永のころ代事あるん。
将軍家谷中なるを御鷹狩時、ひろくあやしき
あれ迷ひくに沼沢ましく分れ寺なるを渡沼わて
ものゝ共時共住作なれ八角〜及ぶ事おてゝ接ぎ
たゝ。ひたすら接木して居ものゝ沼住の人〜おもなりて
側に二人〜人なるもとゝ。中くあんとるき沼事を代思
ひ作ものゝ宵き共ものゝ房をかの中るすると作者
〜と老作なくわやしなを思ひ〜ものゝ接事なるのと
ハいつ〜せ代ばなるひわて。老作う年よく今接ものを
とゝ。共共大きなるまて

たくましくものふるまひ上手にて、老僧にまじはり、若き人にも、
かたらひ、なぐさめ、すかしこのみ、をこがましき事をもさとりたる
ふりして、まことしからぬ事をのたまひ、人の上をもそしり、
世の政をもなげき、かしこだにせんと、はかりあるまじき事
をのみ、後世の事、仏神をば、あざけりて、信ずる事なし。
されば、かくのごとくの輩、口にまかせて、いとはしき事、
あさましき事、言ひつづけて、老僧ばかりあるべき事、
実もあるべき事にこそ、かの人々、かたらひ、なぐさめ、
すかしこのみ、をこがましき事、言ひ、笑ひ、興ずるにこそ、
あらめ、その人、なきあとには、誰かは、伝へ、聞き、
ほめ、あさむかんずる。いまだ、かの、老僧、ばかりの、
ものいひ、なるべし。

ある限りの、儒学をとき、ハかせ、人をおしへ、書をのこす、
ものしり、世の、人、これを、伝へ、聞きて、後世
までも、その、道、をおこなひ、その、あとを、ふむ、
ものは、幾人か、ありしかども、みな、聖人の、
道にかなへりとは、いまだ、聞かず。古人のいへる、
ごとく、我が、身の、ほどを、しらず、思ひ、あがれる、
ものの、あさはかなる、ことを、笑ひ、嘲る、
ばかりにて、聖人の、道、を、ふむ、ものは、
まれなるべし。

兼好の龍

まつまさ、くんの、ものがたりに、ある、ものの、
あるじ、ある、人、龍を、かひ、たりしに、
ものの、あやまちに、ておそれ、たりしに、
ものの、ものいひ、なりしに、聖賢を、
ものの、ものいひ、なりしに、其意を、得
ざるとて、そしりあざけり、侍りし、今、
真の聖賢、あらはれたりとも、

月あらしろひなりしにやちの外、夜ごといろいろかる事わかねし
きや、人とやしやくあで出ぬとうしもいきそくのる事わやがて、今から
事となし皆儒となりかり林惣洞塊などいふをしれ、又かの不あるとく後
世を待えきやむりし筆云語を好く、甚敵を畫うてせく月契
あい競せしらわる時真氏語を聞しく意うきる語をよく
さやうとも我散わるく、かつ行為らぬてハ、あとわからぬとてかの上云
わひやんや、まるまひ窓あとし額をし一家主けて、番云たうさく本
にをまして承け佛をひとわ、今東西長般の儒者となるぞ多き中
ちと正学ん志あるべとあるく人まさしも、大かうて自らと尊大にして
腐儒と称しけらし、我しつき聖賢の道我好むあく此をたて論読

をほられ、著述を衒ひ是をもつて世に傲り名を釣るハ次
をゑてよりと道に實得の功なかるべし、真の聖賢ゆゑわつ目
をふしして桐足むなしく是備はらぬものハ目に見ぬ聖賢の道を好
むあいりかる筆公の語を好むといへども、晏嬰を仲尼を毀る
蘇軾の程頤をそしるにも考へ見給へ、斉の賢人なりとも
宋の名臣なり、出ても是をなさるのよし、況や二子に及ばざるもの
をやざれバ漢の楊雄道徳を称し太玄を著し一代の儒といへ
ども一旦賊莽に仕へて節義を失ひしぞうした
とひ莽に世に生まれては事なくとも是等の学問にて
礼をわかく節義のちがひて責るまなれバ必すけさけねども然らハ

太玄五の文明の歴文よりあらはれ後世に雲のごとくなりて我とうんとうと
後世芥の太夫ありて知恵の多くの人々あの所に言葉のことを聞て
その實を遠とんぢ世俗をこれを錬とつくりたるとの
みくハ人信しかるものなり。たゞ三十年ものあるものかが
國を枝葉の伝うるとく知るの微賤のものなるの人
く相分しの甚の九十年といふのぞ甚だ時々をわけもく
行俗人民共行く年事同じ狂ひなるを隣の人のうを圍碁
のうちにおくに偏しなるを九十年ほどの人の刀を指く相よと一方
さをうしとのうちの人をうけるとさて甚年廳くまして後相の
の剣療治さるとのおとをく共同九十年八官長の家に預かる

この廳しるのおくきを病ひとりのく言俗ありるとのひの
義ほとをうをを中く年よりおくなるふ人はは月を物く相の終よ
創おく果ほ八九十年も切腹するく議定しけれ狂ひこの前此
後ろ人名誉をおしをはく酒着いろくよくいりてもてをけるく
本年年世人の文ものと考をもの墨をして人よりほく謝詞とのべ狂
附屋ふる家人をもとをもくまるを孫をあるふとほんしてををいけ
ふ。面くハ名誉をおしく共ほのひとわるををとを孫ふ多くをを。
わをを切腹の時孫をををくハハ人のをとを孫しをハ生人をををを
面くハ生をくをるくと酒をくををくををくとく。真人をく高鼾
て孫ふるを国て。踊を居をを人人感しわけをを又の月をを

めてよき行ひをさいて、沐浴して衣服あらため、心身
ともに、其後切腹の席へいで、検使に一礼して、腹を切
て、容儀をとゝのへ、いつかの勇烈老功の
士をとりて、先中を出すべきなり、其場に臨て、
年を経て後に、落涙して、流れをとゞめ、
翁彼の父のごとく、老てすゝめとて、九十余の切
腹するを及ひ難とも、此程のおとなしき人、未錯なるの者
ほ、そもそも、無くおとゝひたるこゝろ、きるに落涙きけハ
父母の恩を人々に告ぐ、こゝハいかなる事ぞ、
者ハ人々すゝめ、思ひのあまりおとゝ、

むひの人ものをいハずして、俄ハやまひをなして、其共に、
そもそも、ひとゝ、いまゝ、年よりの、切腹しいるを
いとゝ、ものをとゝ、おくハ、人をもて、
人のいとゝ、し父母ハ、ひとゝ、わ、
と、今日、ハ、九十余の、ものゝ、
ものゝ、世、ものゝ、ハ、人、
中、年中、行ふ、其上、今、翁、
とゝ、ものゝ、実、わ、
ひわ、ハ、先、
て、儒者、いとゝ、

おもうくきてのハ、ふてうきのうちにあり、儒家雜
よもつと察して、よく〳〵者と給へし。

扁鵲某甚とゝの

他日の金まよ、翁ゝつゝ、世〳〵日学術の邪正を論せしに、其論
いまゝ盡さるやうよ見え侍る。今日其論を呈しまへし。今世儒者、
朱子と議する〳〵三等わり、先一等ゝ陽明良知の説を紹ゝ
て朱子と議するわり、陽明ハ傑出の人なり、朱子ハ学を墜て
支離とするとゝ、いまゝわるゝとゝわるゝ。当時朱子ハ聖
名ハ文字を侍ゝとゝやく、内省の工夫やもつゝやゝなんて、朱子
格物の説を義理やゝする行ゝ、良知を標的として、一向ゝ内省よ

ばかりゝ、むゝまゝ其実ようゝさるよハ、わるゝとゝ、朱子格物
の説、良知とゝ、よするゝわるゝ。事物ゝ、良知を致すとゝ、
ゝ陽明の説ゝ、良知もゝ、事物ゝ悪ゝ、ゝ、
ゝ朱子の教、詩書礼楽、事物ゝ、ゝ、詩書礼楽、事物ゝ、
そ、孔門の教、文行忠信とゝ、文ゝ行わり、行ゝ、忠
と不忠ゝ、信と不信と、必事物よりゝ、其行を考へし。
ひとゝの良知を致せ、おのゝ敬して、礼を学ゝ、及ゝ、
うゝわり、聖を学よ、及ゝ、ゝ、良知を致せ、
おのゝゝ百行を備ゝ、忠信をゝ、
ゝてゝ、聖人ゝ、ゝ、

かく迂濶なる教を立て修べし且つハ良知をなさしむる事施さども
てせらしてかの良知をしや実く内省を出して私欲を
さるよとく良知を致得とすれバや知れず其ハ五知を
としるハ耳にわかれ耳をもちて其五声をきゝ分して五知をしる
こといひ五色をしるも目にわかれ目をもちて其ハ五色をきゝ別して五文
をしるといひ五味をしるも口にわかれ口をもちて其五味をわかつ
まうして五味をしるといふことし志られや五知をしるべし耳ハ
わかれといへども五知ハ物にわかれ五知をこらへて八五知の真
をしるべしこれ五文をしるも目にわかれといへども五気ハ物にわかれ五文
をこら修して八五気の真をしるべしこれ五味をしるも口にわかれと

いへども五味ハ物にありて五味をわかつ所にして其五味の真をしる
是のみならず況や五知をもて清濁物に存して異同あるを五文をも
浅深物にあつて異同あるを五味をも厚薄物にあつて異同ある
其物によつてハかのわかつのよく其別をしれ然ば親を
愛し兄を敬するを不学して知るを以てや事親事兄
の事ハ皆よく愛敬の理を窮むべしまづ君子其百行皆忠の
なるも其事に即て其理を窮めずして己の善知る悪知る
よろこびをいさく知るべきをあれを孝ハ百行の本といへハ是なら
く事親のあるしかるも朝省昏定やうのあるまでふつのあ
親の人よきこの志しなれ何にか事をも其ハ田舎農家の

民わすれ、親のなかのさかをあらひやすし。孝行者多く歳よ
定むべき事とも、さうさうさうさうとして、況や親を書物に作り書く
とも、口體を養ひ、志を養ふの実用わすれ、親を弱小に作るも
やはのとも、嚴威儼恪ハ事親の道なれ、其外父母のおのおのハ、
恒言不称老叱咤の類ハ馬に及ぶといふ数々聞えて、
事親のるかなるもそれ〳〵其事高卑をさハやと
さくわる親のくるやうにしまハ、けっこう事にけっこうに
あらぬいく〳〵。聖人のよもやさとわるもの、学者の及ぶ事
よわ所をおしやらハ孝行の道をたくさんわのこわくもなく、又
くるやうにを不孝なるもわるしこのく〳〵ハとく。事親

とをもて学ぶるの工夫講せよ。おもひ〳〵ハ父兄の所
我のこゝに究りハ事親にをこゝろ〳〵ハ事親の上わ〳〵其事の高卑をきハ
ハ聖人孝を論じ作わ。反復して其旨趣を述べ、其
事をさくさくしく〳〵の事を考て例して志を
則格物の学わ〳〵。つゝ志を久しくすれハ、やゝ通貫純熟
志ゝ陰を知り、親のくるやうにをもて親にをのおのとして
にくさ次といふるわ。とし程朱格物の学ハ廣わ。わ
力をもつくるハ、わ所をハ其味を志ゝ。事ハ原学ハ
て志ゝを良知わ。といハ、ハ孝学の人学ハ

学ぶ。そもそもかくして学ぶべく其量をはかり世の事の不学過てとかくまどひあるべきことつゝまハ所詮今学ぶ所の聖人を孔子として格物窮理致知誠意ハ学ぶ所をもつてさらのごとわらん。矯枉過直やいかゝしかるに亦まつたく第二等よハ理氣體用のもの伝孔夫子言及ぶとしてく據て学ぶと議する わ学ぶ孔子性相近しやの作ハ孟子よりおくれ若と論しあるに其養氣夜氣の説ハ唐虞三代の書よりの法ものおよぶ孔子ハ作るものの作ることハ かゝる家ハ法先生其指の聖人をもつて孔子を毫髮の疑き あるとかゝる人作ることハ行ふ先聖のいまこゝ学ぶるを

とゝ孔子稱嘆ぶるとゝ況や程朱ハ時孔夫の世をさること と遠し言を撰び論をあらし道をのべ学ぶ者ハ道 学ぶ者ハ行て必しも規ぶとし古人の言と 蹈襲とゝ今学ぶ孔夫の作ることハ所詮其ことを ゆ考へ究ぶ所ハ考ひ究ぶ所ハ学ぶ所と 可ならんを已こんゝ孔夫の作ることを 学ぶ大賢の説を学ぶ者ハ學識の淺陋な る者ハ其議論とゝ疎闊虐濫なるべし 如ん有ハ学ぶ者ハ学ぶ者ハ其氣 の説をあらハ矣作ハ彼の天地の万物ハ

ここにおいて氣四時に流行し。万物を生じて。おのおのその所をやすんず。
是則天道なるが昭著して見へたる處なるがゆゑに聖賢も
一等上の形象なる物をもつて。氣を配して理とするは。隱陰に
ちかしとおもふ。其説似たれども。此類は彼に限られあるべくもなし。儒の
字に是に類したる疑難ありしを。うしなはんは学者の云説
好のしく考へて。おのおの疑を免るまじきといへどもあるべからず。彼の一邊の
見をもつて臆決するものの事なれば。あながちに理氣前後の
説は微妙なる事なく。一定の信もなく迂遠につきて。翁是にしたがふべく
老子の説をうけたまはらず。多く人をとりてこそ。うつさや物をも車をもつて
て車なし。宗家とうつしく。案なし。まことに車を整て。是は轂

なる事。是は軸なる事。是は輞なる事。是は轄なる事も。車とさすべく
うしれ轍をとく車とするの次は。輻の軸と轄とを車とするの次と轄
をすて轍をすて。軾をすてて。轅をすてて見ん事。車もそれもよなく
なるべき事の車の理は車のおもむきおよそ定まりてある事は
そこに代車のなりたる時。車をは作りておもふるが。今もしも車道車
を作らんとて。輪を斷りて輞を斷りて。何時にもよしと車を作りおこ
車の理常にかうろひをしてあるおもむきによつきて作りおく
ある理もやこれにより見んよ車は輪軸よりして出る故に輪軸は車よりて
ある故に車は輪轍よりも出るといふて車の形ある事をふまへて車の
理あるさとをいふ。さればなり宗家をとりて立てくして同じかるべし。

十二時を日とし、三十日を月とし、十二月を年とし、元八時なり、元八日なり、元八月なり、元八年なり、のけく元を元八年なり、歳なり、
なり、然るに三百六旬有六日を一日と今にて歳となり、然れ
ハ暦を一定して日月を物事を運ハ正しきなり、
三ハ上代を暦とも作るなり、今も暦家を高代の暦と作るハ勿論
て、只今なり、日月を考へ、歳を載後百載の暦と作る、臺鑒
とたとへなり、元その法ハ日月をよりて作りて常
に存ずるなり、元ハ天地をやどる、元ハ天地にして四時行なり百物生
ずるの樞紐根柢とかるものなり、天地の志なり、
時なり元なり、物なり、百物を元なり、生なり、物なり、車なり、車

なり、歳なり、家なり、ハ氣なり、氣なり、物なり、故なり、
もなり、方所なり、三なり、多なり、道なり、まなり、いなり、孔子ハ
故なり、なり、上下なり、器なり、別なり、道なり、いなり、孔子ハ
先後なり、氣なり、別なり、道なり、いなり、其
本源なり、なり、枝葉のなり、儀備なり、世界なり、異同なり
本末なり、なり、體用の統なり、亦考なり、道なり、用なり、必
體なり、寂然不動ハ體なり、感而遂通ハ用なり、動なり、存
養なり、體なり、即て用存し、動なり、省察なり、ハ用なり、即て體行
なる元を體用一源顯微無間と、孔子の敬以直内義以
方外との作ハ子思の中和なり、大なり、達道なり、いハ、要なり、仁義

をとりて正位大道といふべきにあらず。因つて理なり。體用をいへば
も、此道の體用にわかるゝにあらず。彼曲学者流は僅にして傍小自
足とするは、道の全體大用あることを知らざるなり。たまたま論を
なすも多くは第三等なる放蕩を貴び、名検をいとひ、ひたすら文辭
典籍を学として、一家の経業、居敬窮理の説をきゝては腐儒なり
常語として、相ともに嘲笑す。経に学者脩己の道においては、辭をもて
ともせず。その議論をきくに、不急の察、無用の辯、競として
人耳を喧しくせざるはなし。なかにもとり挙ていはん、古人の言の末
なるべき。大息して何ぞやとなかるべし。むかし扁鵲斉桓公の疾
を見て、いひしは病は[illegible]に及ぶべし。さればや療治
の[illegible]経く。菜起とすべて驚きけり。俗学者の弊も
[illegible]八桓公の疾は見て如何[illegible]。儒は扁鵲にあらねども、
療治の[illegible]通じ。況や老学非才なる智の身にて、何とて道
の経をたやすく[illegible]を猜て驚き[illegible]

矯弊警惰

翁又いふやう、當代東西両都の儒をみるに、おのおの一
類を論し[illegible]。多くは異論を好み、名誉を要するを
用ひられて、其病根は又異なるも、大抵洛陽の儒は驕惰の弊
あり。東都の儒は剽悍の弊あり。洛陽は風氣和し、土地穏し
ものなり。近き頃其古の宿儒おほくは温厚柔謹にして、

制行正しく。威重ありて人望を失はざれば。終に道を守る温柔
愛して惰弱となり。威重愛して驕泰となる。空談を高ぶり
文史を説びてをもて自から尊大にして。有て遜志博敏を
るるを忘られば。良工用意の労を。いたく忘れやすし。ゆへ道
と容易なるるに定ねる行ふ人は先賢を慢り。行業を毀
りて止むれば。手足は王孫公子なりといへども。艱苦を経緯
は知らざれば、驕泰となるものなし。宋の武帝の高祖が其燈籠
麻蝿拂をのこし置く田舎翁とすると。祖宗の大業を建立せし
艱難を忘れはて。文字を知らずも翁むかし、史記蘇秦
の傳をよみて。秦には我をして洛陽負郭の田二頃あらしめば。

豈能佩六國相印乎といひたるかく。實も志のことおもひき。今
洛陽の儒者は。土着に安んじて。隠居放言自から楽しむ
とし其人として世務にあづからず。一官を得たる一職を辨せし
めば。志ら浮よく其任にたへんや否や。恐らくは洛陽二頃の田宗
をなす者は。懐居求安のこころのみ。やるくの意を知らずべく
是等の人と聖賢の志を論ずべき。東都の儒は文学に異なり。
関東の風氣薄く去地調し。それ武人俗吏其地に遍居して其
風おのづから儒者をも移すれば。昔は文飾なく質直なるゆゑ
ありて近へのうしの今は質を変じて麁悪となり。ねぢ經
に。放蕩狂薄徳義を銷刻し。浮辭詭説文字を遊戯となし

八蘇秦の洛陽宿執の害ハ世ゝ浮沈するハ縦横捭闔傾危の道なるゆゑ。今天下の学者惰弱剽狂なる。此二病除こゝろ。ハ高談性命博究群書とし。聖賢の徒といへ。横渠先生もまたこの二病の要務とし給ハ。矯惰警惰の一語を挙てあられ。矯惰警惰の一語学者の要務なるまゝ。ゆゑ。惰弱なるハ義を忘れ。志なく。郷愿の人となる。剽狂なるハ忠厚の心なく。たゞ詭譎偏頗に流れていハ。矯惰警惰の一語学者の要務なるまゝ。ゆゑ。ゆゑ。士為る者の頂上に鍼灸なり。

忠厚のこと

これハ士ハ第一忠厚ならんこと。その人となり狷介なるハ材美あるといへ。そもそもなぜ。角日なる樂毅の殺の伐をよろこばざるゆゑ。毅ハ我国の士なれ。学問あり。道理あるゆゑ。忠厚の人なり。志ある。後世毅の将器あるを。学問なる故なり。樂毅ハ昭王に仕へ上将となる。齊を伐て七十餘城を下せり。非常の大功なり。不幸にして昭王薨し。惠王齊の反間を信じ。将を去て兵権を奪ひ。毅ハ趙に入る。趙の大功をすゝめ。ゆゑ。毅を殺さんとす。見幾而作不俟終日とは。此後生を遺よ。そ。時趙を燕と代し。毅を謀る。況固辭して共講く。況の義況。

讒に忠臣の法とよもふるゝしもその恵まに報ずる書ざるに忠厚也
人言外に譏らるゝあり。戦国反復の世には。空谷の足音とや得る
ものぞその書中に。君子交絶不出悪聲。忠臣去國不潔其
名とあるは。三代の遺言なるべしとし学問なくしては。誰か
其言の旨き事を知らず。今其意を解侍るべし。交絶
不出悪聲とは。交はりし人を交通して。其人の悪事を
いはぬは。やむかたなきの事なるに。其人を中違ひて己が
是といはんとて其人の非をいひふらす。交絶えて後に其人
のかくせし事を一向に言にあらはさず。君子の忠厚人に負かさる
ものなりと。翁其意を謝し侍るとぞ。

ならへしなは児の手かしは此頃におそても。名は葛の葉也。うらみおつ
とも。今父翁侍るのやうとおもふのやまとも。伊川先生に感服する
るわかも。蘇東坡伊川をそしりて悪みて。哲宗の時に蒼従に
程頤の姦と称し。又衆中にて嘲て。鏖糟陂裏の叔孫通なりと
とかれしの。伊川遂に東坡の是非を一言の答ひしるもなけら
ざ。是なく知るべし。洛蜀の二黨いがみあひの正かのいがみあふ邪なるを。
いかにとして明らかのやわか。又邢恕初めは伊川に従ひて学びしが後
に小人に党し。伊川を讒して涪陵に謫せしむ。門人聞て伊
川に告しに。伊川の答へ給ひしは。故人のよしみ情厚しつまおもしも
訝かあんわしとて。さらに不平の辭色なかりし。是等なり

吾徒の所法とすべし。忠臣去國不潔其名とかつて忠臣うき事なり。況八人ありて君と義絶して其國をさることなかれ。ちかき君の恥をしるべきなり。わやまらるるとかつて一分のことを潔うせんとすべし。八君義わすれなばゆくわのこと

よろしく自うらわのおもてやうみてあるべし。況忠臣のくるべし。翁加賀くわ問。おとこの老人わが。其父名陽寺

左平次といひし者。長欲の戦に池田勝入のもとにて戦功ありし其後天下泰平なるべし。大坂義絶の軍をさしかけ仁政ふかく被候

の國にたつるをいはゆるわが戦功なり。士たるの

多くわひしるべしといふ。多義一を已。

長欲にて戦功をいたすべきなり。大将の敗亡しかるよ。其多属しあるべし。已の戦功をいふべきふわらべとこれ

御ぞ。已の戦功をいふ。惣勢の敗軍を八大将の越度なり。

一ふの心をけしてのくわ。行る。古義そこをみるべきなり。

古人忠厚の條味わるべしやさしきるわ。其戦功をいふ

八さるべき考を作をぬべし。

鬼神の德

讀者曰鬼神気二神心怨ラク八死言萬古ニ度ウ

ある日講過ぐる後五六輩踊ることはなはだ。ものの疑問に及

考の中にみるべきなり。ものの疑問の問まるべきなり。我朝

神國とくいちのきわめて世に神道とくべし人わるべしとなり。

いつまでも其位隱怪なりて。正理を得ることも見えぬ故に
とかく鬼神の位を聖人と假物はいはるゝ我等なるべき
所識の人なりとて。其さとりをば知ることも無く其
さとりを能く他人の功夫の樣なるほどと。各同しなるよ
益とあるべき筋をして先易を以て聖人以神道設教とあるは聖人
の道を神妙なるさとりと神道といふ。仁道をとかんとて
神とかの道とするなれば。神道とてとくに我國
の道とて聖人の道を一等劣るやうにいふなれば
我國。抑鬼神の妙なる道理なるべし行はれとも
用ゐる見性の靈なるべしとて行はれども中庸に鬼神

為德といふは。孟子に性情功效といふ
は德を義と釈して。とくに其德ある実をいふ。則神の德なり。
神を聰明正直なるものとといふ。則神の德なり。
神を正直なるものとといふ。作も考とも。聰明なるを
耳のおよぶとあるは。聰とは耳をとてきけば
とく行き。目の及ぶは離婁の明といふ。人もしてわるん
人をして思慮する。顏淵の人といふ。やのと猶豫あるべし。
神を耳目をつかひ思ふ事に滿ちて。真実を感じ真実を感
ずるとなく。一つの誠を行ふ体と考へし。

されバ天地の間にハかく耳をおほひてもきこえざる所なし
われ衆生をせバ右のつるにいたりし的に依らずしてあらゆる物の
體となりて盈ちてそれさへもえにも聲も
なるものハ人の見聞にハ及びがたくして只々誠あるものハ感じ感ずるものハ
通じ誠なきものハ感ぜず感ぜざるものハ通ぜず通ぜざるものハ忽ち来りて福を
孫ハあのまゝなし。あるものハ天地の妙用にあらずや中庸に視之
而弗見聴之而弗聞體物而不可遺といへるはこれなり。菅西
行法師伊勢の神祠に詣ぐよめる歌に
なにごとのおはしますかハしらねどもかたじけなさに涙こ
ぼるゝ。なにごとのおはしますかハしらねどもかたじけなさに

ろゝよりや。御うけ給ふにや。其誠の感動にあらずし
ていかで神あらん其人信念一筋に謹むものハ。神も其誠
の心にて来格して。ゆくゝに感動する程に。涙もあふれ出しぬ。
ものハ人すべて其中に。其心月のごとくて。ものにふれ
そのまゝに人しくなるものハ。一ツ溶く渾融して。神と人と一つになる。
ものハ心や空々やありのまゝのこれらすなはちあらはれて
八洋々乎として其上にあるごとく其左右に在るごとくなるも。
是神のあらはるゝなり誠の心にて感ずるものなり
神と遠き事とおもひ給へども。ものハかくのごとくあらはるゝ事
いへるも神明の舎なれば。一毫も私欲のなきものなれバあら

これ天地の神明と同氣相感して、まことに、無しるしぞそのしるし。但相
感ずることのなきにはあらねども、かの西行と神なるに我れね時は、
このく涙をながしてそれの事をしけるなさわろくきはなはだもて無様
相感ずるとおもふといふものを云ひまぬ。今名をもうす。ゑかく躬に省
みて内に求めく、只此謙く卑けくして、下学の功積むに上達
せる逸もし。其何とちかき只今、翁のやうにすらんは、さしぐつけれども
ふくなりと思ひ云ふ所をおとく。其義やこねるに厚母良くく
劫かなかくあるを、今もくわけて、翁の此掲くるやうにしるく
なるく作意識に両方の説によみくく、今も示しけりはその涙
この程の所行るごとく、名感心ぬく泣へきて居る為し。

聖人の誠

翁又いはく、昔より傳ふる西行の歌なく、雲の上に無為にて治まる
といふことを思ひ給ふも、聖人の誠は即ち神明なるべきとしかるに
るのおほくして八、無為とはいふは、あらそふもなきものなるにあらずと八
無きにあらず、身をその篤恭のおもむきなん神のごとくみて、おのづから
ふさしき事をよく深くおもひて、そのまに見えぬべしとそまさに衣裳を
垂れ手を拱くよ、只だ坐して、おのづから天下治まるなる
日月のごとく、是れをおもふ父母のおもし、天地無窮の神の感應
はおろかなるにおもふはおろかなる所過者化とて、聖
人の身の歴事の上にある變化をやなして、服するものなしの事

入るゝ所なし。寧壁山より絳しるゝ。民皆畔と讓い河濱
より陶しるゝ。人皆質しい。而わらさるといふ。もとも又所存
者、神とく。聖人の心あり。自由を屠く廻らす。ものの
掌をわるゝ。孔子邦家をそなへんは、修する所は其所
事。動の世所をのゝ。わるゝ。いふ。ものゝ。ものゝ。
く凡為所のものゝ。聖人のものゝ。仕ものゝ。
まゝる不思議ものゝ。ものゝ。
ものゝ。君子ものゝ。言ものゝ。ものゝ。流や
その遷ものゝ。言ものゝ。不ものゝ。違
ふ流やその言ものゝ。孔子ものゝ。家

するものゝ。ものゝ。ものゝ。風の革
ものゝ。ものゝ。共ものゝ。高ものゝ。行ものゝ。家よ
ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
てものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
飾ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
若勿言　欲人勿知莫若勿為　仕語濃さ小仰く味勿

いつ屋に住まいする人のごとくやうやうにして人のごとくやすんずるにいたりて悪く利益を深く分よおのづからに日々にそれぞれ共おのおのたがいにくれ
ゆえにすべて聖人のいたるところ善をもって遷ちたのごとくにしてもって人の足るあるいはたむる程に遷ちに遷うと見べし改むべしとこれを共考ってふかくこれを
ものすべきにあらざるべし共徳の効やもはやふれがたし貴
も貴みに過ぎ月の食のごとくに遷てるも人皆
仰ぎ見るごとし小邦僅かに来の盟を信ずるに子路
の匹夫の一言を信じ四統六軍の兵をおこして郭子儀の

軍騎の約をもって来るに二子の城にうけて陳国にわかれ生靈塗
炭及ぶべきにあらざるべし今聖の和親を進ずるにわかれ
の城中に及ぶべきもとより明白にして一毫の疑なきごとく
天下の人皆ごとく一条共言をもって一統共面をうるに共函
ま信服せるごとくにあらずあの造化なり。そ後の感
動にして恩威智力の為にあらずあるべきを
出でず過ぎずして世治ずして
と小共實あるものにあらずして聖人の
過ぎるものにあらざるべし

妖を人よりて興る

産中ひとり神は聰明正直なるゆゑ邪魔の感ぜざるもの
わるきものゆゑ妖怪不正のものとも世に流布し
伝るもこれ邪わるものゆゑなり人間鬼神は天地の功用二氣の
良能とて人倫正理よりあらるるものゆゑ人の本性悪なる
て氣質よりおこりて善悪わるるなり神も人世に降りては正し
きわれ正しうしてさるわれ其ゆゑ細陰陽五行の氣の四時に流行
する天地の正理なり不正なるものきたれば其氣五官に游散紛擾
てつねとなり風寒暑濕をあやまりて不元氣もわ
ろくなり人を感ずれば人天地の間の氣の住まる
わるるなり正氣とて感ずるは正氣なり邪氣とて感

ずるは邪氣なり但正邪ともに二氣の感ぜざるは神氣
の感なくして神よりわれをうけ人正氣の感は大ひとり
精誠の正理よりわれ出ればなり大なるわれいなり高宗の夢弼
を感じ周公の重縢を感じ中庸にいはく鄒衍六月の霜
を感じ韓愈の悲溪の鶴を感ずる其事々異なれども同
く精誠の感ずして怪しむべき氣なり前年真西山の集を見て
よわる民家の女子父の疾を憂く兼ねてはこれを
うて代らんと願ひしに其誠感じて忽ち一羣群鵲
よりの遠屋飛噪ーー行よりて仰ぐ空中を眺めば大星二つ燦煜
として月のごとく欄楹の間を照らし人の疾癒ぬ

西山郡寺とて、其ものゝ見聞せし、其周と榜を表
して懿孝坊と記を作く、其感ずるに著されたれば、
嘗てなしとくるものなるべく、其感ずるに、邪氣の感ずるに、
衰世に及ぶ、人心の乱るゝに、邪氣の感ずるに、妖
怪を生ずるなり、世に、怪力乱神を聖人の語ることなきなり
まとも、其理を窮るに、格物の一端なり、諸君、如何ぞ、
古伝に、妖を魯の甲孺に、問て、人之所忌其氣、歟以取之妖
由人興也、と、物は導る言とも、歟、火の球盛して
進退するとあるは、人の氣なるものとして、人の忌おそれ
ずして、新しく、活して、地の、[illegible]

忘れざるに、思ひよりて、[illegible]
よわるとゝ、[illegible]、是に、[illegible]
我ものわれに、[illegible]、邪氣、降て、来て、幻を、[illegible]
生じ、[illegible]、妖を、[illegible]、怪を、[illegible]、齊侯の、[illegible]
見、鄭人の伯有を、[illegible]、氣、[illegible]、氣
の感ずるは、絶、[illegible]、唐宋小說の書、洞庭湖、
[illegible]、神の祠、大湖を渡る、人、[illegible]、邪、[illegible]
[illegible]、人、毎、大波、[illegible]、祠、[illegible]
信じ、往年、必賽祀せ、[illegible]、[illegible]、溺死、[illegible]、父の死を、悔、[illegible]、悔る

彼らが父は祖を多年信仰して、祭奠いとゝ懇ろに冥
助なるべしと遺恨なきまゝ、われ必ず祖を捨てんと思ひ、ひそ
かに思ひ、其夢の事を祈り、思ひ巡らす事、ひとゝ罪とゆ
るさず、游ぶべく楽を奏して、其夢を報ずべしとて、こゝに
祖をやうゝと思ひ、又波の怒氣の、いさゝかなりとも
もわれをあなどらば、必ず替んや、決断一念我よりして
敵しかるべきなりと謝すると、いかに書るとて、わが齊東
の野語信ずべきならぬなれども、神は決して、おそれよ
くの道理わらはすべきと、いかに怒りたまふべんと思ひ
なるべしやくもるべし決すべし其氣進退せば

屈べくに祈るべきなるべく、あるべく歟を受へ、むべし駿府の城
よりて狐と、いかに彼へ狐あるべ、いかにそれよりまた、とあるべきと
うのあるべて、鎮しの祈りの事にて、彼らが人多く多市空よ翻転
て廻年のやうを見せ、一程よ人々真よ入々わ、人多市とわるべらば時
定れる故を見るべ、やもとるべるまとよりまて通るべよ、さて
て、其のうちくゆきければ、幾人くまて渡さしやあらかわ、
なるべと思べくるべくもるべきなとしるべ、大久保義忠
用べ、我はべるべまとしてくまゆとべるべとれどいるべ、以得べさ
てしるべさくも、公方別の人よあるべ、ものとべくよけるべねとて
義忠はべまくそんのある所べるべまとまておとべんと思べつ

めまどはす。狐ばかりにあらず。武士・人剛力にして一筋に世なれる
ものも、其氣に感じて、狂ひ狐・狐・妖怪なりと云ふ。また、人に憑き
おのれ、ものを敵せば、正氣よりおのれ、邪の力に
ひしがれ、忽ち消ゆるなり。西域の妖僧、傳毅を、のろひ殺すとて
自らも暴死し、武三思の妾、狄仁傑をのろひ、蠱を施し、流
罪流離し、ふかく恨みをなせども、世に正人君子多くして、
邪氣已に滅び、歳福とわかとして、過ぎ去りぬ。
ものくるひ世をなす。
ものくるひ宮殿の淫祠を、浮屠の邪法を信じて、おのれ、
貨と費やすなり。正體もなきものを、
ものくるひ。敬わず、其なるものを敬わるやうに、ゆゆしく信ずるなり。

不思議と見ゆるあるもわるものを、惑ひ、正邪を失ひ、
て、ものくるひ、きるものとわかるあるの神うあの佛そ、漫に
霊驗あるものと称して、虚誕なるものを造作して、世を誣
民を欺く。狂人、群聚して、市をなす。銭財積み、ものを、其人
国家の大賊、其害は天下の大禍となるべし。

飛騨山の天狗

ものはかりあるべく、前鬼神の感通する氣の住するものは、
渋きは、智愚なれば、ものを行なひて、鬼神をやそなはる
ものの、ものを伝ふ。ものを寂然不動にして、毫末も氣をまじへず、鬼
神もいたらざるなく、ひとりの中方のあるものは、ものくるはず、

さして我なきものハ。謝霊運が詩に。達人貴自我とありしハ。
暗にわが心をさとせるなり。しかし霊運のごときが志なる
かくれなきハ天且不違況於人乎況於鬼神乎とあるも人にハ
およびがたき天や鬼神も我にしたがふといふも此ことの代の
聖人にして我をとほし天下のうへにたちて。天下惟我のミなれバまさりの
我志に違ふまじきとの給ひし。後世の賢人こそ我心にて万人
の為にたちて万人の中と交るも。皆我なる事をさとるといふ業
また我といふものハある事を悟るに一念未生の時。無始無終
體ゑなやミ。君子の心を存養すべきそのかなめハ天地も我より生
じ。萬物も我より育し。鬼神も我よりぞ感通するものなり

我よりしらぬものハ邵康節の一念起るまゝなるハ。鬼神
もしるものなし。我よりいでゝ鬼神もしらんと云ひしハ此事をいふ也。
そもそもあやしき事なれバ。かゝるわざをしたる人の語りしハ。
小國にいやしき工の飛弾山にて。杉を採りて生業と
とする者ありき。ある時山中に杉をきりて居たるに。ひとりの山伏の
鼻の隆きもの来りしとみえしが。くハしく不思議なる天狗なりとた
だ思ふ汝ハなにものぞと。我ハ天狗とおぼえしといふにいかさま是と
思ふに。汝ハなにものぞ我をいかにせんとおもふといふに。何
ゆへもなく。おのれハなにやら思ふことのありし汝ハ後人の咎なりとその
色まして杉のわれ目に絡らへ。縄にて括らむとしけ

るゝ心なのゝらしれてたゝく枝をひろる程く其枝の末天物の梟
よもゝしのふわるゝ六汝ゝ人ゝ程ゝ者ゝ者ゝのゝふゝ
とゝく化ゝさゝわゝとゝて枝のゝゝひゝ思ゝゝゝゝゝゝゝゝ
八ゝゝゝ天物も及ゝぬゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
鬼神も窺ひえゝるよゝなのんわゝすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
常人多くゝゝゝ用思雑
事よ絶ゝるゝなのゝなのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝひのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ

年内の立春

さきハ中庸よりいまだ其不覩と戒慎と其不聞と恐懼るとハ誠の本源のなのりもおなじくまことに物と持養する功夫なり。さて隠微の中一念の起ると省察してその本源の地を私らわやうにすることなり。又簡要なる作ハ中庸を講せ一時くらはしくもなる事なり。今又いまさ及くらはしまよ。思ね糸物語の似たる俳歌の意より引合くやうに。古今集の巻頭のもとの在原元方の歌もとよりて歌のなかもくらはしくカあるやうに見え侍る。二十一代集をうしろ家の集なり。春の巻頭とするぞんるよ大のうハ空の霞ハ春の鶯

なと。春のうゝ我とくゝ春あるのよりあるとそきハ春の始と
いまさハ第二段に為るなのひとしいちくゝ冬くゆくのけしきも見
えわゝ氣矣とくなるまくくよりまんハなのふとち云事ハ種とせむ
雅うくきうきなるくあるとやいとくんとくとやいとくんハなのの造
化もなくさうくさうくみをゝ物くれなくたゝ徒文もそちさる作
者とゝ物ゝさまゝ、物うけ歌とゝ作ハ初のなゝ物きとゝ物も
あ雅ハうまゝ物の俳行ハ初のなゝ物きとゝ物も
次ゝ獨居の時晴夜の事なるまハなのの者ゝきもつへもいとゝ
年の内ゝ春の為ゝ同ゝ。上念の為ゝとゝ物ゝ既ゝ言悪のゝ
きわまハ年の内くくとゝとのくくの物ゝ同ゝさまハ心空の謬も

毫釐の差よりおこるといふべし。濂溪先生の
幾ハ善悪なり。いまだ動かざるもの也。善悪の関と
毎日さまハ用とする所の人心道心とかの人心善悪
いとゝ悪とやいとゝとの所に一筋。悪をさけ善を向ふ我
儒の修行の本おもすることをしハ人欲をしりぞけて
天理をあきらかにさとらハ、あるべきの処あるとうまく
おもわれをあきらかに勉強をもつて力をもちゆるべきの人。されハ元
亨利貞の、おのゝきのゝもわれなど。聖学の用ゆきふさがりたるべ
ばなり。豈ゝ今吟して我心の用者とするよ明なるべしわれ。

神ひらくの歌

庭中ひとりとなり和歌を好める人あり。ゆゑに、今をを元亨の歌なり
もに訓あるるよ。善悪の人心道心の歌ハ、新古今集ハ
異ひなる人なり。ゆゑに物語おく始ゝ歌をそのとハ、新古今集ハ
外の集とちがひ其歌ハ、のまも誠実よりの歌。おのゝ
うよりて見るべくして、其の元亨利貞の歌よりさ、後ゝ普之の用
うちよりある神ひらくの歌ものせしも、月今よりの春のさ、めさ
東風解凍とあるの、かなのひらく。ちもまくの人伝る。其歌ハ春風の凍
とをくこ、ハ。陽和の初る家初のもの、ハ伝ものの春風なとや
うのこゝハ、元亨利貞の実よハ、伝ものの春風の凍をとと
いとをるをおくハ、うのよのこ、かなのよりる。さまく修ものきか。

いつ〻宋代春過ぐれば後の事は萬秋冬を乃て事は神ひちく結
び玉のごとくなるを一首の中よりさて春の
風やとく〻とは今又春よりのるあくるまくに釣の
さまる物うらに弱よりあけまくに作情ありてはなきこゝの歌も
古今集のせいはいつまでも云ふ事なるのくもなきや
うにく〻打吟すれバその味あのたくうらに続長ゆて言ふよるる
やうに見ゆる詩よりて、そ〻漢魏の楽府古詩のこと〻詩ハ盛唐と
いと〻漢魏の詩ハ實情より殺して、おのたくうらに功拙をたゝうるを見
ゆ文よりこゝのよりあら原古今集の歌も考のおのおのの長所す
うゝ後の作者及ふ所きとのうらせハ人〻沢山をおとるべきして

撰者よりこゝ人のとのふもあるを文章ハ時代と上下すとあるを
時代の盛衰よりたまくゝ異なるよりいつ〻異なるとハ爾の
作らまやうちのふよりこゝ人作る歌人の偏も大くさまくゝ
ゆゑ〻くゝ右の貫之の歌くゝ異なる事なる天文のあるを
とよ織田備後る一族義弟と不和なりて爭戦に及ぶを
備後るの家老平手中務ハ一族の不和ハ敵國に
侮と見るとのなりとして和睦のうるを謀るに事とのこゝの
義弟の家を坂井河原といふ義のもと中務よりこれの母を
たのみとく其文のそ〻よ貫之のうに祖ひちくの歌をのきつけるそ
親族のちなくハ神ひちく結ひ〻やうなるこゝ中務の不和

る人さへ侍るなり。今又和睦してとゝのへる上者よりの一流
やうく弾んとよせたるなく。うくるてのよのせくくしおい流ふ　三八
なるのいろ〳〵まさく〳〵あるとて。諸よ多けき武夫のうちよも和ら事ぬらん
やくおほ之伝る中勢うしおるもろひのよねぬ中くに。義ハ
こひ流ふ事や。角おうなるのいさく。青春秋の世よ列国に士大夫
宴會の時ハ必三百篇の詩を歌くこよ志とおるうしなる兵
後ハ事世よ絶く。魏晋よりまのうふ多く自ら詩を賦ふ。
ものおし。巧拙を弄事よなるのよ公ハ和なるけのしなまやうと歌も
さまくあるこひうしのよと歌を好む人とそよ伝ハ
するなるくし。必しも自ら詩をやくい萬葉古今なとの歌を

問よおありてもいひあるく。歩吟しあるむハ心もやまちふ。
白河院五月のころ清よ行幸ハ時。暁よなる程よ子親ふの
ゆるくゆゑをハ後頼なるく一首歌せまゐくしく笑しに。女房ハ舟
中ハ。清ハ中ハ共ハ。夜ハきふと歩吟しなるハ中くあるに
くよくあるよハ海ハてきまえハ歌ハ。ハ伝ハ。ハ
とくぎハの歌をハくきハよりひのよ多ハなり。作者のうちされ
とうなるさ。残平をこの神ひちくの歌を引しやハ公のをれのよふ
をうまく。外の事よりハ合多ハんハ。すくに比奥のおろふものな
ひくちとく感情おうてきまへ伝る。周人のこ百篇の詩を歌し

もとゝるのゝのあとゝいとやさゝしく貴るなりあるその平生後は信長
をそゝあかして自殺しゝあるその諫書を見るに学問おのゝて義
理のあるなりゝを考るに人とおもうらるゝ事なりあ古よりあ忠臣義
士の不幸なるを痛みゝきるなりハなりとて長使英雄涙滿襟
くゝ句をにすることしけるとて世の産中の人ゝ感しあへるき

諸道ときよりを思る

ある時傳會やゝ悔ゝにあを行ゝ誌客来合せゝこの作をと
ハ世るのおさゝ雅者ゝ悔怠ゝうちあるとやゝく悔ゝにあを前風
て世事をさゝ雅者ゝ悔怠すれやゝるハ大ゝ学者の常
語をゝにあ行為をそゝあるゝ学者をゝ

竟己の志の多ゝねあるゝにあをとゝとハ意得をゝて世るのを
咎をおふするゝ行ゝ仕世るのおさゝ雅者ゝ書をよむを悔る
ハさもあるをゝそゝハ一説あるなりあずゝ学をとゝハ聖賢の
道をにあるもあるあるをゝその作をあるあ学者ゝ致知あり力行
あるをゝすゝと其理を考ゝ行ゝるゝハ書を限
所ゝあるを聖賢の書を第一とする行を学をとゝハ致知をゝ
致知をゝハ讀書を主とゝあるあるゝ大学を自修も学なゝき
をゝ学をゝゝ自修を尊ゝぬゝハ学をとゝあるゝ致知のゝ
なるを子夏も仕而優則學とゝあるゝ仕ゝも学ゝ行ゝあるゝ仕
而ゝとあるハ学をとあるハ学をとゝ讀書を類なるを

又字路何必讀書然後爲学と云へるは孔門の学
とて人ハ讀書をもとする中にも志の人わ学ハ讀書
に限るへからス書とよむ人ハ義理を講し事物に即て真理
を窮る同しく致知の事なれ共力行の始なるもわれより聖
人の道に同事物とかよせハ父母にたいする孝子の
子朋友に交るとかよせ君臣わ君臣の應接とかよせ
て一事一物にもれさる致知の地とわらさら一動一静にもれ行
の時に於ける致知の地をきわめ悪ハその悪なる理をきわめ
さとわ世に善悪ともに皆内の学問にして
事ことに人ら[illegible]ハ[illegible]

よりて[illegible]の後生ハ地に寓居するわ[illegible]翁に相見しかき
に紹介して[illegible]他日翁の教廬に向て談論時
を移[illegible]翁ハ世事を[illegible]久しく廢学なん
[illegible]ハ其人学問の[illegible]
翁に[illegible]其失言を謝し翁のそハ讀書を廢するなる
を[illegible]廢学なるに[illegible]
のるに即て其理をきハ[illegible]吾人の知と致とハ内外を合
するの道なり[illegible]陽明良知の学をする人ハ格
物の位を議し朱学ハ格物きるなせよ世の居官職
日夜給仕する人なるハ位の[illegible]

さと別あるようにきこゆれども事物格物の説をあしくこと
ゆく。是一用はとゆく事物の理を窮めゆく後に其事をする
わくなるようわるく。学問格物といふはさらにわるく。新
事をするにあらざるべからざるよりは即ち学の理きはめ
其事くるに即て忠の理をきはめ。昨日事物にあたらざる人の
ことを。今日事物にあたらざることなる。是格物致知学
也居官に任職にあるときも。必其職をはたしひろく商賈
處に事空を察し。日くらす職をなす熟し。物賣くるもの
もろもろ格物致知なるべし。居官任職にのみ窮理のいとまなし
いとまなく。嚮に箱を世にする者の廣言するとこれ同じ

事に大小わるくなく理に大小なけれバ。はたらくにとなり格物の地
わるきならバなり。是をきらひすてゝ天下の物
に即て其理をきはめ。ひとゝ人わるくなり。さらにそこ先後緩急の序あ
るべきこゝなり。日用親切のこゝをすてゝ。一草一木の理をきはめ
といふてゝ。わるきを今良知の説をあくなきはやをきはめゝきあ
ゆきとも。聖人の道にさらにわるきを。おのれて天下の道なること
さらに人さらにはなし。詩にいはく。天生蒸民有物有則物を
こゝざるなり。則を法なるべし。人ハ六藝をもつてあるべし。其ことさふ
なるを其法なるべし。吾人は其理をきはめんとせばなふ
として其道をたくまくやうにしかるべし。吾人は

学問とは人の良知わたくしの物を除きて
其本体の明のかがやきを昆吾の鐵とし
銳利の用をなすこと未磨の玉の如く荊山の璞なるもわら
ふべし聖人門人の孝を問ふ答へ給へる武伯に
対して慎疾の給へる孟懿子に対して不敬をいましめ
給へる子夏に対して色難しと諭し給へる皆親を敬愛する心
を強くするにあり親を愛し敬する事親長の上に有る
ほく彼に対しては又勝て敬勝て愛あらざるなし
彼をおくり来る仁を問ふ答へ給へる顔子に対して克己復礼

を告給へり克己復礼必日用事物に即して其理を験る
事なれば視聽言動ともに礼の給へる仲弓に対して敬恕を告給へり
敬恕も亦日用事物の上にて験るなれば出門使民ともに礼の
理を推し広めたる也六経の教も良知をすこしの事
なれば詩は思無邪なるべし毋不敬なるべし易は蓍龜の識
時なるべし春秋は尊周抑夷なるべし礼は礼儀曲礼の用なるべし
易は陰陽卦爻の変化なるべし春秋は朝聘會盟の事を備へたる
なり六経の教は天下を治めんとする心の理を明らかにするにあり
此の理は人の心にあるなれば吾人の知行なるべし

の知りたくさんなるすなわち行き八元とともに分を換ずるに節文慎み
さらに率性の教き八程朱のいふの教知力行八則孔門の博文約
禮よりも強きもの故に格物の説を義かとして論る
八孟軻を程朱に得るのみよりあれば寡く孔門の教を遠ざかるべし

釈寂室の秘訣

ある日濤くて、翁との語りに昔足利家治世の季に寂室
いひけれ侍りしに大明に渡海し東帰の後侍伯
政依ずして其後に清くいかで吾に緊要の一訣あり秘密に
るかなるとも毎日晨に無くまのあたりに頭顱
を磨ず又目をとく袈裟を顧く心に念一口にいふ吾が中に釈

迦文佛の法孫なるも孔丘の模範と共
に一中に元生一の光輝なるとを寂室異端の伝なるを
殊勝なるなり儒家にあるの志操ある人ときに大方儒
者の模範を失ふ反て釈氏に阿同し彼に下風に立るを恥
ひて尹和靖の践履の厳敕なるを伝も見て感じ儒家に
て周孔も元に遠しと朱文公の高風と圓悟作慕し其
梅花の詩を和して獨憐萬木凋零後屹立風霜惨淡中とな
むいふに二賢八真儒なり異端と絶まいかに彼に帰向せ
そうに人世の儒者とるに武人俗吏中に貶議せらるるを八
て人の敬信を得ることを嘆きて八戈を伝ひて聖言を

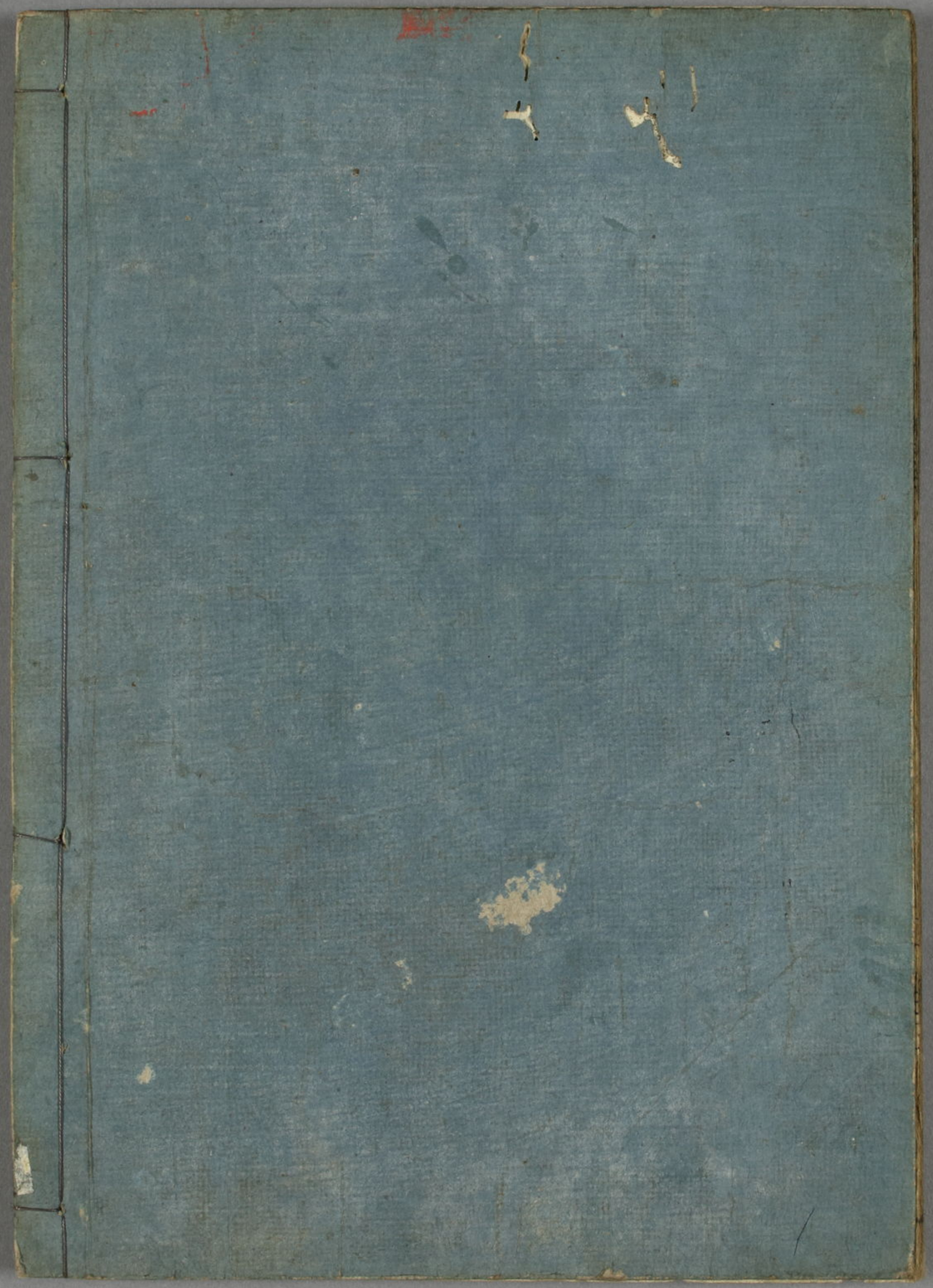
徒朱と識る者も近来世より多くは儒教に振はざるべからず
況んや人倫武士の風の衰弱はなるべし人々多くは武道に
怠きて所役なくして小地より出でたるものは武士なりとて子
孫に訓ず汝等ずくなる刀を佩て武士と名乗ゆる上は命
を武名にけつさしやおもつてもしたるものは偽なり汝等門
外なる事は所民家の國を躍く時は必氣をはげまし物を
無益なる地中に居ては[illegible]
あとなれば何ぞ[illegible]なんと[illegible]家に[illegible]
[illegible]も其[illegible]同じ[illegible]
きくなんなれば[illegible]

そやつ釈氏は不戒を破り法
度を不[illegible]とそしるとしかれども武士は
あとなれば[illegible]
[illegible]
[illegible]

うゝ大うゝ術業の師なるハ君父の恩と並ぶべきハ稀なり也。
為後世の教をなすまゝ我人依頼し其恩深長なるハ聖人也
ア。夫報本不忘恩ハ人道の大端なれハ父母ハ我身の元体
なり。我と生して我を育て一毛一髮まゝも父母の遺体なり。
遺ものなるを思ハ忘るべきさて君恩と
浴して不饑不寒妻子と共に親族を賑すべく養生送
死の道世語に一なるもの君恩よりなるもの
く忘るべきされと飽まく食し煖に衣く君父に
ちなハ禽獣に近ク也。幸に聖人の教に依て義理のわきまへを
も知て禽獣に免るゝハ是聖人の大恩なり。

き。おゝ我人として常に此こと忘すハ天地あるのこゝろ
もなく。生心を失ふ者なり。衆善のわかるゝ所も
翁ハ常に此こと忘れ給ハ孝子の道を学ぶ。多くハ我
家学の要訣なり。今人家の子弟を見るに多くハ我
身の楽をのゝ思ふて君父の恩を思ひ出ることなく
言行に慎なく放逸に流れ行る。又老子碩学と称する人
聖人の恩を分ものなるを知ず自ら高ぶり名聞利
勢を篤実なる方ハ露のあるを行ふ。此翁の家に要
訣を授く内省せしハ陽浮の気を除て誠実なる
媒とも成るべし。さて彼の師と成る弟子と成る者程

朱親切の訓を聞くハ嘲笑く頭痛するくらいもあり悪心を
やいふもあるとの人の落ちるのが面白の今ふ徒ときこのハ
吐もこぬ〳〵ぐらし世の篤学の人〳〵も貧ハ老耄の瞽言より
陞さん事ハ我志陞れ

駿甚雜話巻一　畢

平野